

日本語教育者ならびに朝鮮語研究者としての岡倉由三郎  
—旧韓末「日語学堂」における日本語教授法をめぐって—

黄 雲

キーワード: 岡倉由三郎、日本語教育、朝鮮語研究、バジル・ホール・チェンバレン、オレンドルフの教授法

要旨

本稿では、日本語教育者ならびに朝鮮語研究者としての岡倉を取り上げ、旧韓末、日語学堂における岡倉の日本語教授法ならびに彼の朝鮮語研究と日本語教育との関連性を明らかにすることを試みた。

岡倉(1894a:12)は、朝鮮での日本語教授において、学習者にとっての母語、即ち朝鮮語を媒介として授業を行い、その授業から得られた成果について述べているが、旧韓末朝鮮の「日語学堂」における日本語教育の成果は、日本語教授法に対する工夫から得られた結果と考えるべきである。岡倉は、その論文で語学教授の最も肝心なところは、教授法であることを力説しており、外国語教授において国語と外国語との比較を基礎とすることを主張しているが、このような彼の外国語教授観はチェンバレンのから育てられ、旧韓末日語学堂の日本語教育におけるオレンドルフの教授法につながったと考えられる。岡倉が日本語教授に用いたオレンドルフ教授法は、文法・訳読式教授法のひとつであり教師が学習者の母語を十分に理解していることが前提となっている。朝鮮語、また岡倉に朝鮮語を教授したチェンバレンとの出会いが、日本語教育者としての岡倉を生み出した決定的な要因であったことを論じる。

1. はじめに

朝鮮末期から1910年の日韓合併にかけての時期を朝鮮史上「旧韓末」と称する。この時期に朝鮮政府は諸外国から門戸開放を迫られ、新しい世界史の流れに直面するようになる。1873年、朝鮮では鎖国政策を標榜していた興宣大院君が下野し、通商開化論者の登場をもとに明成皇后の集権が始まった。朝鮮は、1876年の日本との江華条約をはじめ、1882年以降にはアメリカ・ロシア・清・ヨーロッパ諸国と修好通商条約を結んで、国際世界に開放されるようになった。このような国際情勢の中で朝鮮政府は、1891年7月漢城<sup>(1)</sup>府南部鑄洞に官立「日語学堂」<sup>(2)</sup>を開き、初代教師として岡倉由三郎を招聘する(『統理交渉通商事務衙門日記』高宗二八年六月二十日)<sup>(3)</sup>。金沢(2006:156)は、「司訳院や倭館

時代の日本語教育は別として、近代における日本語教育は上記日語学堂に最初に招聘された岡倉由三郎(1868~1936)をもって嚆矢とする」と述べ、岡倉が朝鮮における最初の日本語教育者であると記している。

しかし、朝鮮における近代日本語教育の嚆矢となる岡倉の日本語教育についての先行研究では、彼の教育と後の植民地教育との関連からの否定的評価が多くみられている。渡辺(1973:74)は、「岡倉自身の主観的意識はどうであれ、その日語による二言語主義の論理構造の中には、後年の日帝期の日語教育が包蔵した性格をそのままに潜在させていた、というほかはないようである」と述べ、宮川(2000)は、岡倉の朝鮮教育論に関して考察し、岡倉の教育観と言語観が明治期から大正期にかけての侵略的国粋主義者たちの理論的後ろ楯になったと記しており、彼の日本語教育が日本の「ハンゲル」廃止政策につながる言語統制の先兵的役割をはたしたと述べている。また、稲葉(1990:63)では、「旧韓末『日語学校』の全体像への接近を試みたものとして渡辺学の先行研究の他に見るべきものはなく、とくに韓国人研究者の間では、日語学校の存在は奇妙なほどに軽視されている」と述べているが、これは「日語学校」が植民地教育に繋がったという意識が韓国人研究者の間で作用していたからではないだろうか。

本研究では、植民地教育に繋がる言語政策としての日本語教育ではなく、外国語教育としての日本語教育という点に焦点をあて、旧韓末日語学堂における岡倉の日本語教育法、ならびに岡倉の朝鮮語研究と日本語教育との関連性を明らかにすることを試みる。また、岡倉の朝鮮語研究の始まりとなったチェンバレンの授業について考察し、チェンバレンから受けた教育が、岡倉の朝鮮語研究と日本語教育にどのような影響を与えたかについて考える。

## 2. 帝国大学博言学科—岡倉由三郎とバジル・ホール・チェンバレン—

岡倉は、「恩師チャムブレ先生を偲ぶ」(1935a:39)で「僕が今日まで他の人から受けた感化は、素より多種多様で、それを一一挙げて言うことは不可能であるが、その中で、特に強大な力を及ぼした存在としては、次兄の天心、星崎はつ子、それから王堂チャムブレ氏である」と記している。

アーネスト・サトウ(Sir Ernest Mason Satow, 1843~1929)やウィリアム・ジョージ・アストン(William George Aston, 1841~1911)とともに、19世紀後半~20世紀初頭の最も有名な日本研究家の一人であるバジル・ホール・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain, 1850~1935)は、1873年5月29日、お雇い外国人として来日した。翌1874年より東京の海軍兵学寮(後の海軍兵学校)で英語、数学、地理、万国史を教え、1886年には文科大学長・外山正一の推薦により帝国大学の外国人教師となったチェンバレンは、わずか4年にすぎなかった教授在任中に言語学者の上田万年や本論文の対象である岡倉由三郎といった次代の俊英を育てあげた。

岡倉は、英語学・英語教育学の専門家として知られているが、朝鮮における、日本

人による日本語教育に先鞭を着けたという意味で、日本語教育史上にも重要な存在である。岡倉(1935a:41)は朝鮮渡航の理由について、「先生から教へて戴いた朝鮮語の研究が、深めたかつたからであり」と述べており、チェンバレンから教授された朝鮮語が朝鮮における日本語教育の契機になったと考えられる。

チェンバレンが正確に、いつから朝鮮語研究を始めたのかは、不明であるが、楠敏(1986:160)は、1880年8月には、サトウ、アストン、チェンバレンの三人が共同で朝鮮語の研究をはじめたと記している。また、楠敏(1986)には、サトウがアストンとディキンス宛に送った書簡が載せられており、チェンバレンの朝鮮語研究について窺えることができる。

…1881年10月7日のサトウがアストン宛に送った書簡

チェンバレンとわたしは、今日、朝鮮人教師のもとで一緒に勉強しています。わたしたちは翻訳について話し合ったのですが、チェンバレンは強固な意見を持っています。たとえば[朝鮮語の]O、O、으は[アルタイ語の]a、o、uにあたると言いましたのです。(p.177)

…1882年3月7日のサトウがディキンスにあてた書簡

アストン、チェンバレンとわたしは朝鮮でずっと勉強して、互いに研究を推進しています。(p.178)

こうした共同研究で、アストンは朝鮮語について論文を数多く発表し、サトウも朝鮮書籍に関する研究を推進したが、チェンバレンは、この時期に『古事記』の完全英訳という大仕事をかかえていたので、朝鮮関係の目立った業績をあげることはなかった。(楠敏1986:160)しかし、このような朝鮮語研究が、後のチェンバレンの比較言語研究と帝国大学の博言学教授に役立ったと考えられる。

岡倉は、チェンバレンの在任2年目の1887年に選科生として帝国大学に入学した。バジル・ホール・チェンバレンの授業については、毎年度の授業内容の報告書である「申報」が東京大学に残され、堀川(1992)「チェンバレン帝大教師時代の資料」で翻刻されているが、その内容は次のようである。

…教師チェンバレン申報

千八百八十七年九月ヨリ千八百八十八年七月ニ至ル一学年ノ第一、二学期ハ日本語ノ変例及往古ヨリ現今ニ至ル和歌ノ方式全般ヲ研究ス其ノ梗概ヲ掲クレバ語原論動詞基原語尾ノ性質屈曲及言語ノ組立トス而シテ常ニ学生習熟ノ外国語ヲ参照シテ日本語ト外国語間ノ異同ノ点ヲ指摘シ且ツ之レヲ解釈シ得ルトキハ其理ヲモ合セテ説明シタリ是ノ如ク自国ノ語ノ沿革及組織ニ略々通シタル後博言学ノ原理即チ博言学

科ノ基礎ヲ説明シ余ニ比較博言学ノ研修ニ導クヲ勉メタリ(後略)(pp.16-17)

…国語博言学教師チャンブレン申報

本学年ニ於テハ余ハ博言学科第二年級学生ニホイットネー氏「ライフ、エンドグロース、ヲフ、ラングエージ、」ヲ教科書トシ勤メテ学生ノ熟知スル東洋ノ諸言語ヲ引用シテ比較博言学ノ諸原理ヲ講授セリ(p.17)

上記のチェンバレンの授業について岡倉(1935b:192)は「チャムブレン氏のお講義は、日本語の、言語系統中の位置やら、その姉妹語と視られる他の国語との構造の異同等を、考に入れての説述であつたからであつた。それらの事は、今日から考へると、特に耳新しいことでもないが、明治の二〇年と云ふ、この方面の学問の極めて若かつた時代には、先生の言々句々が我々に驚異の眼を見ひらかせたのであつた」と回想している。後に岡倉(1894c)は、外国語教育における語学教授論について説いているが、文法の教授方法について「原語の文法書の祖術を止め常に国語を比較の基礎として兼て生徒の学び知れる文章の中より説明の材料を取り原文に存する規則のしかも我等に用なるものゝみを授くべきなり」(pp.33-34)と述べており、教師の矯正の要点は外国語と国語との連絡を密にすることであると、し、「外国語の教師は其教ふる外国語と其教へ方とに精通したるは勿論国語と漢文に就きても能く之を比較の基と成すに足らん程は必ず之を知らざるべからず」(p.42)と説いている。岡倉は、外国語教授において国語と外国語との比較を基礎とし、外国語教師は、外国語は勿論国語と漢文についても精通しているべきであることを主張しているが、このような彼の外国語教授観は、上記のチェンバレンの授業から育てられ、旧韓末日語学堂の日本語教育におけるオレンドルフの教授法につながつたと考えられる。

博言学の講義については、「先生から次に教を受けたのは、アイヌ語の構造のあらましでであつた。その次に先生は、朝鮮語の文典を説かれ、且つ、仏国宣教師の夙に出版してゐた *La Grammaire Coréenne* を資料として、同語の演習をも指導して下さつた。(中略)アイヌ語は、日本語とは別の系統の語で、日本語に知られない、受身の前置詞のある事や、アイヌの数詞が二十を単位として物を数へ、例へば、七十を示すには $(20 \times 4) - 10 = 70$  の迂りくどい様式を取ることなどを説明して下さつたので、僕は、アイヌ語より朝鮮語に一層強い親しみを感じるやうになつた」(岡倉 1935a:39)と述べている。岡倉は、チェンバレンから比較博言学を学ぶとともに、3年間アイヌ語と朝鮮語の指導を受けていたが、上のように日本語と朝鮮語との構造上の類似ゆえに、朝鮮語に強い親しみを感じたようである。

上記からみると岡倉の外国語教授観ならびに朝鮮語研究は、帝国大学に在学中チェンバレンから受けた影響が大きかつたと考えられる。前述のように岡倉はチェンバレンから教えてもらった朝鮮語の研究が深めたいということで朝鮮へ赴いているが、チ

エンバレンとの出会いがなかったら、日本語教師としての岡倉もいなかったであろう。

### 3. 岡倉由三郎の朝鮮語研究と諺文観

佐藤(2004:64)によると一般的には岡倉は英語学英語教育学の専門家として有名で、その業績も英学関係が主であるが、最初から英語学・英語教育学を志したわけではなく、初期の研究は、日本語文法、朝鮮語、琉球方言を主としていたようである。しかし、小倉(1928:309)が、「岡倉先生が嘗て朝鮮に在任せられた際、朝鮮語の研究に没頭せられ、それらに関する幾多の有益な論文を発表せられたことは、今日知る人も少なからうが、先生が朝鮮語学の上に残された偉大な成績は、今日吾人其の学に志す者の蒙を啓き、後進を益するところ頗る多きものあるを感ずる」と記しているように、岡倉の朝鮮語研究については、多く知られておらず、それに関した先行研究もあまりなされていない状況である。

岡倉の朝鮮語研究の業績としては、「朝鮮の文学」(1893a)、「吏道・諺文考」(1893b)、「字音考」(1893c)、「為古吐考」(1897)、「主格を示す本来の辞」(1900)などが挙げられる。その業績を見ると、彼が文学から吏道、諺文、音韻、文法まで幅広く研究をしていたことがわかる。また、「恩師チャムブレン先生を偲ぶ」(1935a)で岡倉は、チェンバレンからもらった手紙を数通示しているが、1901年3月27日の書簡の「I am glad your Korean studies are being kept up. Japan has, I believe, a great future as instructress of the whole Far-East」(p.41)について、「“Korean studies”云々は、僕が東京外国語学校で一時朝鮮語科を主裁し、そのついでに同語の研究を続けてある旨を、先生に報じたからである」(p.41)と説明しており、東京外国語学校教授に任じられ、朝鮮語を担当している際にも岡倉が朝鮮語の研究を続けていたことがわかる。

本稿では、1893年『東洋学芸雑誌』に二回にかけて掲載されている「吏道・諺文考」(岡倉:1893a)を中心に岡倉の朝鮮語研究および諺文観について考察する。また、朝鮮における日本語教育との関連性について考える。

岡倉は、「吏道・諺文考」で、題目には、吏道と諺文を並列しているが、論文の大部分は諺文に対する記述であり、吏道に関しては冒頭の部分で、簡単に言及しているのみである。しかし、岡倉の吏道に対する理解は、当時の日本人学者から認められていたようで、岩橋(1918:208)は、「本邦に於いて吏道に対する正当の理會は、実に岡倉氏の吏道・諺文考に始まるのである」と記しており、白鳥(1897:98)にも、「吏は胥吏の吏なり、道は仮名にて、彼国の語に語尾と云ふことなり、と岡倉由三郎の吏道・諺文考に見えたり」と述べられている。

岡倉は同論文で諺文は「世宗の朝の製作は決して創作に非ず必ず模作なるべし」(p.434)と述べ、諺文の起源について、創作ではなく模作であると主張している。理由として、「凡そいづれの文字にても一朝一夕にして容易に出来あがるべき物に非ず、殊に諺文の如き形象の跡なく文字の本分たる音韻想起の単純なる符号に至りては、他の

既に種々の発達を経て纔に成就せし者を其儘借り来るか、または之が製方を見做ひ斟酌して造るに非るよりは決して、一時に其域に急進する能はざるなり」(p.434)と述べ、諺文が形象文字から造られたものではないという根拠を諺文字母の規則性から探っている。岡倉は、「母字」を‘아야 어여 오요 우유 으ㅣ·’の順序に挙げ、「父字」を喉音(ㄱㅇㅇㅇㅇ), 齶音(ㄷㅌㅌㅌㅌ), 硬齶音(ㅍㅍㅍㅍ), 唇音(ㅂㅃㅅㅆ)に分けているが、「母字」が一定の規則によって造られたこと、調音位置が同じ「父字」は、同様の外形を有していることから、諺文は形象文字から発達したものではなく、他の既存文字の構成を十分に吟味してから案出したものであると主張している。

上記を前提として、岡倉は、諺文が模範とした文字が何かを探ろうとし、様々な起源説に言及している。『慵齋叢話』などで主張する梵字は、諺文との間に顕著な類似性が見えないと述べており、神代文字の一つである阿比留文字については、かえって、諺文が阿比留文字の根源であるとしている。次に、アベル・レミュザー氏の説を紹介しているが、11~12世紀頃、韃靼人が朝鮮を威服した際、入ってきた韃靼文字が変形して諺文の基礎になったというレミュザー氏の見解については、「然れども諺文の果して西藏文字の変体なりや否やは未だこれのみにて確定すべきに非ず」(p.494)と述べ、評価を保留している。

その他、胡僧了義が作ったという説と窓の障子の方形から文字を割り出したという説を言及しているが、すべて否定している。また、朝鮮人の中に諺文は舌唇の形状を模倣して作ったという人がいるが、「此れも採るに足らざるなり」(p.495)としている。

岡倉は、「史道・諺文考」で諺文の起源について様々な説を紹介しているが、決定的な説はない。結論としては、「諺文の製作に関しては未だ其充分なる事を知るを得ず世宗の朝禁裡に諺文庁を設け既成の仮名を参酌し現在の諺文を整へしは実事なるべきも其時まで朝鮮に仮名なかりきとも又其時始めて仮名を創作せしなりとも未だ断言すべからざるなり」(p.495)と述べている。

また、岡倉は「史道・諺文考」で『国朝宝鑑』に載せられている鄭麟趾の序文から「(前略)癸亥冬我 殿下世宗創制正音二十八字、略掲例義以示之、名之曰訓民正音、象形而字倣古篆、因声而音叶七調、(中略)遂命臣等詳加解読、以喻諸人庶、使觀者不師而自悟、若其淵源之妙、則非臣等之所能發發揮也」(p.433)を挙げているが、この中で、「遂命臣等詳加解読」と「略掲例義以示之」に注目し、解例本の存在を推測している。彼は、「名之曰訓民正音」から、諺文を訓民正音と称することと一旦理解しているが、『臣等に命じて詳に解読を加へしむ』の句あるのみならず、『ほゞ例義を掲げて之を示す』ともあれば訓民正音の諺文の別名には非ずして、さる題目の書籍にはなきかとの思はるれども(後略)」(p.434)と述べ、訓民正音が諺文の別名ではなく、そのような題目の書籍ではないかと推定している。そこで、岡倉は、朝鮮のある博識人に訓民正音という題目の書籍について訊いたが、そのような本は見聞したことがないと言われたと記している。岡倉は、結局、やはり訓民正音は諺文の異名であり、「名之曰訓民正音」

の「之」は、例義を掲げ示しているのではなく、創製の物を指しているという結論に辿り着いているが、諺文の使用法等を詳細に解説した本が存在することは疑心の余地がない、ただし、その題目は知り難いと述べ、解例本の存在を強く信じている。岡倉は、「訓民正音」を本の題目であると考えながらも、確固な根拠がないため、やむを得ず諺文の異名であると結論したのであろう。1940年、岡倉がその存在を信じていた訓民正音の解例本は、安東郡臥龍面周下洞で発見された。本の題目は、『訓民正音』であり、訓民正音の解例があることから現在、『訓民正音解例本』と呼ばれている。結局、「訓民正音」についての岡倉の考察は正しかったのである。

以上の「吏道・諺文考」から、朝鮮語に対する岡倉の深い理解、また岡倉が諺文の優秀性を認めていることが窺える。諺文が既存の文字を規範にしないで、当時の学者が独力で作られたとは、信じられないという彼の態度は、諺文を見下したのではなく、却って高く評価したのであろう。

岡倉(1894b:24)では「其組立略羅馬字に同じく、世界無比のアルハベットと云ふも不可なきが如く、誠に突然なるものなり。然れども、其行はるゝ範囲は、極めて狭小にして、女子又は下賤のものゝ書簡等に用ゐるに過ぎず、受取証の如き迄、尚日本に於いて正に受取申候也と、日本流の文章にて、一の日本字を交へず、全く漢字のみなると同じく、朝鮮流の文章にて、支那人にも何の事やら分るまじけれども、兎に角漢字のみを用ゐるなり」と諺文の優秀性について述べており、諺文が漢字漢文より軽視されていたことを惜しんでおり、岡倉(1894a:10-11)でも、朝鮮国民教育に際し、漢字を廃すことを唱え、諺文を用いることを主張している。

…国語の採否は其国独立心の養成に関係す。故に修学に際しては、国家独立一端として、是非とも彼等自国語を似て学ばしめざるべからず。由来朝鮮は、漢籍を用ゆと雖も、言語は全く相異なり、寧ろ日本語と稍や似たり。然れば、従来漢学を勉めたるにも拘はらず、言語は全く自国語を以つて学ばしめ、同時に文字も漢字を廃し、而かも朝鮮国固有の仮名文字即ち諺文を用ひしめざるべからず。蓋し朝鮮の文章は凡て仮名文字を用ひしむべし。(中略)今の時に當り、朝鮮教育を改良せんと欲せば、断して従来の漢字を廃し朝鮮文字朝鮮言語を以て修学せしめざるべからず。

以上のように岡倉は、朝鮮語について幅広く研究をしており、朝鮮の固有文字である「諺文」に対して高い評価を与えていた。前述で岡倉(1894c)は、外国語教授において国語と外国語との比較を基礎とし、外国語教師は、外国語は勿論国語と漢文についても精通しているべきであることを主張しており、外国語教育における母語の重要性を力説した。岡倉が、「日語学堂」の日本語教授において学習者の固有言語である朝鮮語を用いて授業を行ったことは、岡倉の朝鮮語に対する深い理解および彼の諺文観と無関係ではないと考えられる。

#### 4. 旧韓末「日語学堂」における日本語教育—岡倉由三郎とオレンドルフの教授法—

「日語学堂」は、1891年7月に朝鮮政府が漢城に設立した外国語教育機関である。『東京朝日新聞』第1944号1891年5月22日の雑報に載せられている記事ではこの「日語学堂」が朝鮮における最初の外国語学校であることを記している。

…朝鮮にては今回日本語学校を設くるに決し京城鑄字洞(我領事館の傍)に其校舎を建築する筈にて目下地形中なりと同国にて外国語学校の設立あるい之が始めにて耶蘇教会付属の学校を除くの外公立学校の設立あるも亦之が嚆矢なりとぞ

鈴木(1894:220)には、「日本語学校は往年我公使より朝鮮政府に勧告して両国の交通年々頻繁に赴くの時双方言語の通せざるは不便甚はだしきを説き朝廷も之を然として教師を日本より聘して設立したるものにて(後略)」と記されており、「日語学堂」が日本公使の勧告によって設立されたという設立経緯についてわかった。また、上記の朝鮮政府が日本より聘した教師というのは、岡倉のことであるが彼が朝鮮に渡った経緯について村岡(1928:400)は「明治二十四年六月、『日本新文典』を著された。その頃のこと京城に朝鮮政府が新設することになった日本語学校で唯一人の教師兼校長を求めてをる由を和田万吉氏から耳にせられ、予てから朝鮮語研究の希望もあつたので、進んで之に当たることに決心し、六月末任地へ赴かれた」と述べており、チェンバレンから教授された朝鮮語にたいする研究希望が岡倉の朝鮮渡航の契機になったと考えられる。

岡倉は、「日語学堂」の初代教師として1891年7月から2年間にわたり日本語教育に携わったが、日語学堂における日本語教育の実践について詳らかに記した資料を残していない。<sup>(4)</sup>そのため当時の日語学堂における岡倉の授業の内容については、その詳細までをわかることはできないが、本稿では岡倉が朝鮮から帰国した翌年発表した「朝鮮国民教育新案」(1894a)<sup>(5)</sup>と「外国語教授新論・附国語漢文の教授要領」(1894c)<sup>(6)</sup>を中心に日語学堂における岡倉の日本語教育について考察する。

「朝鮮国民教育新案」のなかで、岡倉は当時の朝鮮の教育や国情について「…該国従来の教育は、唯孔孟の教を奉じ、忠孝の道を説くの一途あるのみ。他に教育あるを知らず。但し近年に至り、日本語支那語英語三語学校を順次創設せしも、実効未だ現はれず。而して、今は孔孟の教も従に虚名を存し、忠孝の道も殆んど湮晦に属せり。故に一言之を約して、朝鮮には教育なし、と謂ふも、尚過酷の評に非ずと信ず」(p.2)、「教育の一部に限らず、広く該国の全体より觀るも、其の国力、共に我国維新前後の比に非ず。之を我国に比すれば千年位は慥かに後れ居れり」(p.5)と述べており朝鮮の教育や国情について批判の姿勢を見せている。また学生の勉学に支障を来す四つの問題点を次のように挙げている。



…其一忌服の事なり。(中略)父母の喪に丁れは、三年の喪を勤むとて、少くも二三ヶ月は出校せず。出校するの時に至ては、学力が殆んど入学の時に還へり。之か為め遂に廃学するに至るものあり。(後略)

其二は、雨天外出せざる事なり。(中略)隨て彼等の雨を畏るゝこと甚しく、非常特別の用事あるにあらざれば、敢て外出せず、故に雨天には休校するもの多し。(後略)

其三、科擧の事なり。科擧は前述の如く、士人立身唯一の途と考られたるを以て、其の当日に至れば、学生の已に冠禮を行ひたる者は、概ねその試場に赴く、故に当日は、他の語学校等は臨時休校を為すの有様なり。而して科擧の多き時には、一ヶ月三四回以上にも達することありたり。

其四、門地と金力の事なり。(中略)彼等の勉学せざる所以で討ねるに、その原因多々あるべしと雖も其の最も大なるものは、門地の職業を制限し、金力の官位を左右するに在り。抑も該国に於て、門地と金力を欠く時は就官すること至て難い。而して、幸に就官するを得るも、高官に登る能はず。且つ内直、即ち京城在勤の官吏と為れば、近来一切無給とせられ、地方官と為らんとせば、一定の賄賂金額を以て之を買取らざるを得ず。要するに、該国の官途は、門地と金力とのために杜塞せられ居るを以てなり。(岡倉 1894a:4-5)

このように朝鮮の教育上の問題を指摘した岡倉は、「朝鮮国民教育新案」で朝鮮における学校教育制度を提案している。彼は朝鮮が急務として開設すべきは中学校、実業専修学校、小学校であるとし、中学校の外国語科目として日本語を科すことを提案しているが、外国語の中で特に日本語を選ぶ理由については「一は日本語と朝鮮語と語脈同一にして相学ひ易すきか為めなり 二は朝鮮に輸入する目下適當の知識は日本語中に含有せらる、最も多きか為めなり」(p.7)、「苦し外国語を教ゆるとせば、必ず日本、支那、英吉利の三候補者現はるゝは今より疑ふべからず、其中何れを採用せば、其目的を達すべき、其实用に適すべきか。支那語は其根本たる語脈よりして反対なり。之れを学ぶや困難にして、其益や少なし。英語は(中略)京城に一英学校<sup>7)</sup>あり、創立以来茲に八年。其間卒業者僅に一人、而かも猶ほ片言交りにして完全ならず。他は皆困難に驚き、中途廃学せり。以て證すべし。採用すべきは日本語のみ」(pp.11-12)と述べている。上記から岡倉は文章構造の類似による習得の容易性と日本語の実利的側面を強調し、日本語教育を推していることがわかる。

「外国語教授新論・附国語漢文の教授要領」(岡倉 1894c)から岡倉の外国語教授観について窺える。岡倉(1894c)では日本の外国語教授法において改正を施すべき点として「教授法の改正、教師の矯正、教科書の改正」を挙げており、「言語教育方法中『オルレンドルフ』『オットー』『コンフォート』『グアン』『モンテーヌ』の如き形式を採り之に充分日本語の特質より来る変更を加へて着々学習せしむるに於ては必ず良結果を生ずるに至る」(p.14)と述べている。また、外国語教授において「余が考へにては時間

を改め増さざるも方法の如何に依り遙に立ち優りたる効果を取むるを得べしとなり」(p.20)と述べ、語学教授の最も肝心なところは、教授法であることを力説している。岡倉(1894c)は、文法教育において、弊の生ずる原因として文法だけを重んじすぎること」と「教師が文法について十分に理解せずに、定義を暗記させること」を挙げ、「文法と云ふ科目を廃し、会話の時間に於て一方より教材を授くと共に他の一方より其中に存する法則を与へ両々相携へて相互の進歩を促さしむるにありては彼のオルンドルフの外国語教授式の如きを本邦語の性質に由り大に斟酌を加へて実行するに於いては假令へば餌食に混ざるに菓を以てするに其苦きを知らずして其効を享くるが如く知らず識らず無味の規則を学ばしむの益あり此種の方法の善良なるは世間既に定論あり余の如き実験上充分其利を感じたる者の一なり」(p.34)と述べており、会話の教え方については、「初学者には、嚮に云へるオルンドルフ、又は、コンフォート教授法の如き式を似てことばの組織上似寄りたる語句文章の使用に慣れしめ生徒をして其学びたる一定のことばづかひに拠り之になづらへて自らこれと同類のことばづかひを為す事を得せしむる様努むべき」(p.36)と説いている。上記から岡倉は当時の文字中心の教育を批判し、文法は会話教授の中で自然に習得する方法を提案し、その方法としてオレンドルフの教授法を推奨している。また、実験よりオレンドルフの教授法の利を充分感じたと述べているが、この実験とは朝鮮の「日語学堂」における日本語教授であると考えられる。

岡倉は日本語教育の実践について詳らかに記した資料も残していないため旧韓末に日語学堂でどのような教材を使用し、どのような教育を行ったのか、その詳細は不明であるが、「朝鮮国民教育新案」で「余は、去る明治二十四年より、朝鮮政府に聘せられて、日本語の教師と為り、同二十六年に至るまで、該国に在て、語学の教授に従事したりき」(p.4)、「余はオレンドルフの教授法を用ひたり」(p.12)と述べていることから岡倉が日本語の教授においてオレンドルフの教授法を用いたことがわかる。

オレンドルフの教授法は、オレンドルフ(Heinrich Gottfried Ollendorff,1803-1865)が開発した文法・訳読式教授法<sup>8)</sup>のひとつであるが、文法・訳読式教授法でありながらも会話の練習に力を入れたのが特徴である。平高(1997:61)は、19世紀に入って産業革命の影響で交通機関が発達し、国や大陸の間に往来が活発化したのにもなって、実用的な言語教育が求められるようになり、旅行会話集などが売り出されるようになったが、こうした教授法や教材市場の拡大を代表するのがオレンドルフであると記している。

岡倉は「日語学堂」における日本語教育の成果について、「余の担任せる日本語学校に徴するに、三ヶ月にして通弁を廃するを得たり。一年半にして日本新聞などを読むもの数人を出せり。(日本の卑近なる俗語は未だ解せざるものも多かりき)三年にして通弁、差備官等数人を出すに至れり」(岡倉 1894a :12)、「余の実験よりするも、朝鮮人は善く日本語を解し、大抵一年にして、普通の用を弁ずるに差支なきに至る。且や日本

語は、目下朝鮮に必要な知識を包含して余りあり、又何をか疑はん。」(岡倉 1894b:24)と述べており、鈴木(1894)でも日本語学校は、「其成跡最もよく既に十数人の卒業生を出だし」と記している。岡倉が日本語教授に用いたオレンドルフ教授法は、文法・訳読式教授法のひとつであり教師が学習者の母語を十分に理解していることが前提となっている。上記の成果は、岡倉の朝鮮語に対する深い理解と熱意および新しい教授法に対する工夫から得られた結果と考えるべきである。

#### 4. おわりに

本稿では、日本語教育者ならびに朝鮮語研究者としての岡倉を取り上げ、旧韓末、日語学堂における岡倉の日本語教授法ならびに彼の朝鮮語研究と日本語教育との関連性を明らかにすることを試みた。

岡倉は、旧韓末「日語学堂」の日本語教授においてオレンドルフ教授法を用いたと記している。オレンドルフ教授法は、文法・訳読式教授法を代表する教授法であり、教師が学習者の母語を十分に理解していることが前提となっている。本稿の考察から岡倉が朝鮮語について幅広く研究しており、朝鮮の固有文字である「諺文」に対して高い評価を与えていたことがわかった。「日語学堂」の日本語教授において学習者の固有言語である朝鮮語で授業を行ったことは、岡倉の朝鮮語に対する深い理解および彼の諺文観と無関係ではないと考えられる。

岡倉は、その論文で語学教授の最も肝心なところは、教授法であると唱えている。また、外国語教授において国語と外国語との比較を基礎とし、外国語教師は、外国語は勿論国語と漢文についても精通しているべきであることを主張しており、外国語教育における母語の重要性を力説している。このような岡倉の外国語教授観は、帝国大学に在学中チェンバレンから受けた影響が大きかったと考えられる。また、岡倉がチェンバレンから教えてもらった朝鮮語の研究が深めたいということで朝鮮へ赴いたと記しているように、朝鮮語、また岡倉に朝鮮語を教授したチェンバレンとの出会いは、日本語教育者としての岡倉を生み出した決定的な要因であったと考えられる。

岡倉の日本語教育は、その歴史的背景から植民地教育に繋がったという評価は避けられないだろうが、岡倉は朝鮮における日本人による日本語教育の先駆者としての役割を十分に果たした実践的な言語学者であった。上述のような岡倉の日本語教育観ならびに朝鮮語研究に対する姿勢から見ても、岡倉の日本語教育を単なる政治的な道具として見てしまうと、現代において改めて考察に値する彼の日本語教育者・朝鮮語研究者としての考え方や業績を捉え損なうことになると思う。岡倉の日本語教育についての評価は、言語教育者としての岡倉に焦点を置くべきであろう。

[注]

(\*)本稿は、2010年10月3日第61回朝鮮学会大会で発表した内容をもとに補訂したもの

のである。本稿の記述にあたって、下記の要領で進めていくことを断わっておく。

①引用に際し、漢字の旧字体は新字体に、変体仮名は現代仮名に改める。②旧韓末における「韓国」「韓国語」「ハングル」「ソウル」は当時の言葉遣いに従い「朝鮮」「朝鮮語」「諺文」「漢城」と表記する。③引用文中に、本来濁点のあるべき仮名部分に濁点が無い場合があるが、修正を施さず原文どおりにする。

- (1)韓国の首都ソウルの旧名の一つである。京城ともいう。
- (2)1891年7月に朝鮮政府によって設立された日語学堂は、1894年5月の「外国語学校官制」によって官立日語学校となる。
- (3)高宗二八年六月二十日は、西暦1891年7月25日にあたる。
- (4)『教育時論』第340号の「岡倉由三郎氏の語学教授論」には、「又此論文に於て、岡倉氏が朝鮮人に日本語を教授したる方法を、詳細に聞くを得ざりしは、甚遺憾なり。願くは氏再び之を世に公にせられんことを」(羽生田編1894:13)と述べられており、岡倉が日語学堂における日本語教育の詳細を語っていないことがわかる。
- (5)岡倉は、東京府尋常中学校外国語科主任当時の1894年8月22日、東邦協会において東京府下の教育家を招いて朝鮮国民の教育新案に対する相談会が開催された際に講演をした。その講演が筆記され、校閲補修を経て出版されたものが、『東邦協会会報』第2号附録に掲載されている「朝鮮国民教育新案」(1894a)である。(金沢2007:3)
- (6)岡倉は、『教育時論』第338号から340号にかけて、附録として連載された「外国語教授新論・附国語漢文の教授要領」(1894b)で外国語教育における語学教授論について説いている。
- (7)1886年設立された育英公院を指している。
- (8)平賀(2005)は、英語教育において日本では「Grammar-Translation Method(G-TM)」と文法訳読式教授法、訳読法の3つが区別されることなく用いられることに異論を唱え、この3つの定義を再考しており、オレンドルフの教授法は「文法・訳読式教授法」ではなく、「G-TM」を継承した教授法であると記している。しかし、日本語教授法においては、上記の議論はされておらず、平賀(2005:8)も「これまで英語で書かれた外国語教授法関連の文献で、日本語に翻訳されたものを見てみると、原著によるGrammar-Translation Method(G-TM)には9割以上が「文法・訳読(式教授)法」という訳語があてられている」と述べているように一般的に「Grammar-Translation Method(G-TM)」と「文法・訳読式教授法」は同じ意味として用いられる。本論文の記述にあたっては、上記の3つを区別せず「文法・訳読式教授法」と記す。

## 参考文献

- 稲葉継雄(1988)「旧韓国「日語学校」の日本語教師—その代表的な事例—」pp.147-16 『国立教育研究所紀要』115号 清水書院
- 稲葉継雄(1990)「旧韓末「日語学校」の諸特徴」『筑波大学地域研究』8号 pp.63-84 筑

波大学大学院地域研究科

- 岩橋小彌太(1918)「徳川時代学者の朝鮮の文字に関する知識(上)」『歴史地理』第32卷3号 pp.200-208 日本歴史地理研究会
- 岡倉由三郎(1893a)「朝鮮の文学」『哲学雑誌』8巻74号 P.843-849、8巻75号 pp.1038-1052 有斐閣
- 岡倉由三郎(1893b)「吏道・諺文考」『東洋学芸雑誌』143号 P.432-438、144号 pp.491-497 城重源次郎
- 岡倉由三郎(1893c)「字音考」『東洋学芸雑誌』145号 pp.528-538 城重源次郎
- 岡倉由三郎(1894a)「朝鮮国民教育新案」『東邦協会会報』第2号附録 pp.1-12 東邦協会
- 岡倉由三郎(1894b)「朝鮮の教育制度を如何すべき」『教育時論』第338号 pp.23-24 開発社
- 岡倉由三郎(1894c)「外国語教授新論・附国語漢文の教授要項」『教育時論』第338-340号附録 開発社 pp.1-49
- 岡倉由三郎(1897)「為古吐考」『帝国文学』3巻4号 pp.378-394 大日本圖書
- 岡倉由三郎(1900)「主格を示す本来の辞」『帝国文学』6巻2号 pp.152-162 大日本圖書
- 岡倉由三郎(1916)「琉球の読者に」『英語青年』第36巻2号 p.62 英語青年社
- 岡倉由三郎(1935a)「恩師チャムブレン先生を偲ぶ」『英語青年』第73巻2号 pp.39-42 英語青年社
- 岡倉由三郎(1935b)「恩師チャムブレン先生を憶ぶ」『国語と国文学』第12巻4巻 pp.192-194 英語青年社
- 小倉進平(1928)「朝鮮語の toin-siot」『岡倉先生記念論文集』pp.309-317 岡倉先生還暦祝賀会
- 金沢朱美(2006)「オレンドルフ教授法の受容の考察ー井上勤ならびに岡倉由三郎の受容を中心に」『目白大学人文学研究』第3号 pp.149-161 目白大学
- 金沢朱美(2007)「岡倉由三郎におけるオレンドルフ教授法の受容の考察」『日本語と日本文学』第44号 pp.1-12 筑波大学国語国文学会
- 楠家重敏(1986)『ネズミはまだ生きている:チェンバレンの伝記』雄松堂
- 栗原銀藏編(1896)「朝鮮教育上に於ける列国の勢力」『教育時論』第414号 pp.28-29 開発社
- 佐藤善之(2004)「博言学事始めー明治・大正の言語学その1」『学苑』第762号 pp.58-69 昭和女子大学光葉会
- 白鳥庫吉(1897)「吏道」『史学雑誌』第8編1号 pp.98-108 史学会
- 鈴木信仁(1894)『朝鮮紀聞』博文館
- 関正昭・平高史也編(1997)『日本語教育史』アルク

- 平賀 優子(2005)「「文法・訳読式教授法」の定義再考」『日本英語教育史研究』第20巻  
pp.28-29 日本英語教育史学会事務局
- 堀川貫司(1992)「チェンバレン帝大教師時代の資料」『汲古』第21号 pp.16-22 汲古  
書院
- 宮川敏春(2000)「岡倉由三郎の朝鮮教育論に関する一考察」『学校教育論集』4巻  
pp.36-40 筑波大学教育学系朴研究室
- 村岡博(1928)「岡倉由三郎先生略伝」『岡倉先生記念論文集』pp.397-404 岡倉先生還  
暦祝賀会発行
- 渡辺学(1973)「韓国教育における二言語主義—日語の特殊歴史相のもつ重層構造」『韓』  
第2巻9号 pp.57-59 韓国研究院

#### 付記

本稿の執筆に際し、指導教員である滝浦真人先生から貴重な助言と指導を頂き、本稿の査読をして頂いた副島昭夫そして、藤本幸夫先生からも有益なアドバイスを頂いた。この場をかりて感謝の意を表したい。